

「男子、厨房にて」

—二稿—

2026/1/29

人物表

生原 想	いくはら そう	中学三年生 想の母・シングルマザー
森田 洋平	もりた こうへい	(37) (14)
福田 壮平	ふくだ そうへい	(39)

想のクラスメート

想のクラスの担任

想の自宅マンション・リビングキッチン（夜）

生原想（14）、キッチンで弁当箱を洗っている。
水を止め、弁当箱を水切りかごに立てかける。

オフィスカジュアルな装いの母・生原京子（41）
がレジ袋片手にキッチンに駆け込んできて、

京子 「想ちゃんごめん遅くなつた」

想 「あ、うん。お疲れ様」

京子、ふと洗つてある弁当箱を見て、

京子 「お弁当、どうだつた」

想、屈託のない笑顔で、

京子 「うん、美味しかつたよ」「

京子 「よかつた。すぐ作るね」

と、冷蔵庫を開け、手際よく中身を取り出していく。
想、背後から冷蔵庫の中をじっと見ている。

想の自宅マンション・想の部屋（朝）

アラームの音。目を覚ました想、ピピッと二つ音が
鳴つたところで、急いで止める。

眠そうな顔で、軽く深呼吸。

想の自宅マンション・京子の部屋（朝）

ぐっすり寝ている京子。想、起こさないように慎重
に、枕元の目覚まし時計を止める。

想の自宅マンション・リビングキッチン（朝）

寝巻き姿の京子、焦った様子でキッチンに入るなり、

京子 「ごめん寝坊しちゃつた」

コンロの上には卵焼き用フライパン。

想、スマホのレンジピット手に卵焼きと格闘している。

想 「あ、おはよう。目覚まし止めといた」

京子、想の様子を見て驚く。少し考え込んで、

京子 「……今日つてなんかあつたっけ」

想 「これからは俺が作ろうかなつて。母さん忙しそうだし」

と、屈託のない笑顔を向ける。

京子、驚く。

京子 「何、急に」

想 「急に、思つたんだよ」

京子 「……本当？」

京子 「……本当？」

想 「本当だつて。これから朝ちょっとゆつくりして」

京子 「まあ、そう言うなら……」

5. 丸バツ中学・三年一組の教室（昼）

想、卵焼きに筑前煮、ほうれん草の和物の弁当。隣の席の森田洸平（14）、少し貰つて食べている。

想 「どう？」

想 「だろ？」

洸平 「……美味しい。想ちゃん、才能あんじやね？」

想 「大袈裟」

洸平 「すごいって。店出せるわ」

6. 京子の職場・休憩室（昼）

京子、広げた弁当を見て、笑みを浮かべる。

同僚 「あらどうしたの」

京子 「え？」

同僚 「可愛いお弁当」

京子 「子供が作つたんです。これから毎日作るとか言つてて」

同僚 「ホントに？ 私のも作つて欲しいわ」

京子 「まあ、いつまで続くか分からないですけど……」

7. 想の自宅マンション・リビングキッチン（夜）

食卓の上には絵に描いたような焼き魚定食。

京子 「……いただきます」

想 「召し上がり」

京子、困惑しつつ箸を進める。

京子 「……美味しい」

想 「そう？ もう少し臭み取つても良かつたかなあ」

京子 「え、なに。彼女でも出来た?」

想 「は?」

京子 「いや、急にどうしたのかなと思って」

想 「母さん帰り遅いし、ご飯あつた方が嬉しくない?」

京子 「そりや助かるけどさ」

想 「ならワインワインじゃん」

京子 「想ちゃんは何がワインなの?」

想 「ん?」

想 「母さんが、楽できんじやん?」

想 「手抜かなきや毎日やつてらんないよ」

想 「西京焼きは切り身買ってきてトースターでチンするだけ。炊き込みご飯も具材混ぜて炊くだけ」

想 「パワーアップしてね?」

想 「あ、そなの?」

想 「手抜かなきや毎日やつてらんないよ」

想 「西京焼きは切り身買ってきてトースターでチンするだけ。炊き込みご飯も具材混ぜて炊くだけ」

想 「手抜かなきや毎日やつてらんないよ」

9. 丸バツ中学・進路指導室(タ)

福田 「もちろん、言いたくないことは無理に言わなくていい。生原の家が母子家庭で大変なのは分かってる」と、真剣な表情。

福田 「お母さんの分まで、最近は夜ご飯も。な?」

想 「はい。今月からすけど」

福田 「……生原、お前それ本当か?」

想 戸惑つていて、

「それはまあ、そう、なんですけど」

福田 「先生が子供の頃は家事や掃除なんて手伝つて当たり前だつた。でもな、ヤングケアラーフて知つてるか？」

想 「聞いたことは」

福田 「大人になつてから後悔して欲しくないんだ。もし先生に

何かできることがあったら、教えて欲しい」と、じつと想を見つめる。

想 「吹っ切れて、

想 「……あの、マズすぎるんです」

福田 「呆気に取られて、

福田 「ん？」

想 「マズすぎるんです。母の料理が」

福田 「マズ、すぎる？」

想 「情熱だけはあるんです。昔ホテルの朝食で生ハムメロンが出て、子供の僕はそれを美味しいと言つてしまつた」

想、溢れる想いが止まらない。福田、置き去り。

福田 「ん、えっと、生原？」

想 「だから何かと果物を使うんです。納豆とパインアップルの

冷製パスタ、サクランボと鰯のシチュー、キウイの肉巻

き、これを三大得意料理だと言つてます」

福田 「それはまた、独創的な」

想 「基礎のない人間に創作は無理です」

福田 「……それで、代わりに？」

想 「流石に疲れすぎでしょ」

福田 「お仕事で、疲れてらっしゃるのかな？」

想 「なんの変哲もない和食と思ったでしょ？」

福田 「えっと……」

想 「筑前煮とほうれん草の磯辺和え」

福田 「ああ、そうだっけ？」

想 「なんの変哲もない和食と思ったでしょ？」

福田 「僕は感動しました。でも皆、安いビジネスホテルの味とか言って、これが美味しいと思つてんの僕だけなんだつていうか。僕つ

て舌もバカになつていくんんだつて、惨めで。でも、これなら自分で作れるかもつて思つたんです」

福田、言葉が見つからず、

「だからつて無理して毎日作らなくとも」

想「毎日食わされる身にもなつてくださいよ」

福田「受験生だし味くらい我慢というか、この一年はお母さんに任せた方が」

想「受験生だからです。下痢が止まらないと思ったらお刺身安かつたつて買つてきた魚が煮物用でした」

福田「……それは、言つたのか？」

想「言えるわけないじゃないですか」

福田「え？」

想「だつて忙しい中毎日僕のために作つてくれてるので、そんなこと、言えるわけないでしょ」

想、思い出したように時計を見て、ハツとする。

福田「失礼します」

福田「生原？」

想「時間がないんです。そろそろ帰らないと母さんまた……」

想「時間がないんです。そろそろ帰らないと母さんまた……」

10. 想の自宅マンション・リビングキッチン（夜）

京子、鼻歌を歌い、トントンとバナナを輪切りに。

コンロではおでんがグツグツと煮えている。

想、キッチンに駆け込むも、状況を理解。

京子「おかえり」

想「……ただいま」

京子「もうすぐできるから、座つてて」

想「うん、ありがとう」

と、一瞬あつて、屈託のない笑顔。

（おわり）